

あとがき

私は税金にかかわる仕事を始めて54年になります。それは教師から税務職員へと職種が変わったことから始まりました。私が採用された頃の税務署は今とは違い、権力むき出しの行政から少しずつ変化をし始めた時代でした。税制に関する考え方も税務行政に対する考え方も私たちが教えられてきたものは現今とは大きな違いがあります。

採用時に私が書いた宣誓書は「宣誓書 私は、国民全体の奉仕者として公共の利益のために勤務すべき責務を深く自覚し、日本国憲法を遵守し、並びに上司の職務上の命令に従い、不偏不党かつ公正に職務の遂行に当たることをかたく誓います。昭和30年2月1日 富山泰一」というものでした。しかし、この「宣誓書」を提出したことも忘れておりました。あまりにも当然の宣誓内容だったからです。その存在を知ったのはかなり後のことで、税務労働論の研究をするようになってからです。

税制に対する国税庁の当時の考え方も、現在とは大きく異なります。1967年11月当時の東京国税局長志場喜徳郎氏は『税を見る目』というパンフを作り、広く納税者に配布しました。

「『税を支払うことは政治へ参加することである』というアメリカの信条は、そのまま民主国家・日本にもあてはまる筈です。税を見る目が養われること、これが日本の民主主義を本物にすることにつながるでしょう」と、そこには書かれていました。

貴重な資料ですので長くなりますが、もう少し紹介いたします。

「『取られる税金・納める税金』—「税金」というと、とかく皆さんから敬遠されがちです。なぜでしょうか。歴史にあらわれた税にまつわる暗いイメージが災いしているようです。たしかに、昔の領主たちは、領民の気持ちにお構いなく、一方的に税をきめてとりたてました。しかも、戦いのための費用だとか、自分のぜいたくな生活のために使いました。領民へのサービスなど考えようとしなかったのです。『苛政虎よりも猛』というわけです。

外国ではどうだったのでしょうか。イギリス、フランスなどの国では、王や領主の一方的な税の取り立てに対して、税をどう取るか、税をどう使うかということを『人民にコントロールさせよ』という旗印を立てて新興階級が闘いました。『代表なければ課税なし』を合い言葉として、政治への発言力を高め、議会を開設し、代表を送る権利を獲得しました。これこそ、まさに民主主義の始まりであり、イギリスの名誉革命、フランス大革命などによってその目的は大きく達成されたのです。民主主義の歴史とは、税金の姿が民主化された歴史です。封建領主や貴族の横暴や浪費から、税のもたらす利益を人民一般

に還元することへと進歩した足跡だと言えます」と記されています。

また『負担の公平は租税の命』の項では、「負担の公平は租税の命です。公平を欠いた税制や税務行政は崩壊し、国家は穴の開いた船のように沈没してしまいます。能力のあるものはより重く、能力の少ないものはより軽く負担するのが負担の公平ということでしょう。……こんにち、世界各国のほとんどの税制は、各人の能力によって税を負担するという考え方のうえに成り立っています」とさえ述べているのです。

税務行政についても同様でした。1954(昭和29)年12月に東京国税局が作成した『税務職員の心得』では、当時の脇坂実国税局長がその「序」で、「民主的な税務行政の車を動かす両輪は、納税者と税務職員である。したがって、公正で信頼される税務行政は、税務行政に対する理解と協力を惜しまない民主的な納税者と、知徳を兼備し、公共の奉仕者たる精神に徹した民主的な税務職員によって、はじめて実現することができる」と述べています。

国民のための民主的な税制と税務行政をどう築き上げるかは、ひとえに政治体制が国民に向いているのかどうかにかかっていることをこの二人の国税局長は語っていたのです。隔世の感をおぼえます。

正しい考え方は時を経ても変わるものではありません。今の政府がどんなにうまい言葉で国民に語りかけても、その中身が国民生活を破壊し、わずかな数の大企業・高額所得者・大資産家にのみ利益を与えている構図が当然だとする開き直りが続くかぎり、国民が豊かさを感じる日はきません。したがって、それを一日も早く取り除くことが、日本の将来にとってどれほど重要なのかを考えてほしいと思っています。

「労働者は支配階級に対して怒りを感じているときだけ人間なのである」(『イギリスにおける労働者階級の状態』)とエンゲルスは言っています。現状を正しく認識し、それが間違っていることを確認できたとき、人は怒りを感じると思います。自分だけ良くなることはできません。周りが良くなることで自分も良くなるのではないのでしょうか。

本書を書くきっかけになったのは、ある勉強会で私が話したのを聞かれたあけび書房代表の久保則之氏が、その終了後の懇親会でご一緒になり懇談したあと、帰途の車中でいろいろと話したことで執筆することになりました。執筆に当たっては、全体の組み立てや文章作法に至るまでご助力いただき、まとめることができたことに深く感謝いたします。

また、多くの先達研究者の知恵をいただいたことで本書をまとめることができました。先達の多大な成果に改めて深い敬意を表します。

